

【御巫八神】（みかんなぎはっしん）（宮中八神）

天皇家の守護神。宮中において祀られてきた玉体（天皇大護身）を守護する神。毎年宮中で鎮魂祭が行われる。

「八神」とは、「延喜式」に見える御巫祭神八座、即ち「①神皇産霊（かみむすひ）神」「②高皇産霊（たかみむすひ）神」「③玉積産霊（たまつみむすひ）神」「④生産霊（いくむすひ）神」「⑤足産霊（たるむすひ）神」「⑥大宮売（おおみやめ）神」「⑦御食津（みけつ）神」「⑧事代主（ことしろぬし）神」である。

この八神は、実在する皇室の祖、ないし、関係者の中で功労者としての神と理念を神格した神と混在しているのは、八神同時に祀られたのではないからであろう。実在の祖と考えられるのが、邇邇芸命（にぎのみこと）の外戚である高皇産霊（たかみむすひ）神と神武天皇の皇后である媛蹈鞯五十鈴媛（ひめたたらいすずひめ）の父にあたる事代主神である。

まず理念上からみると、「①神皇産霊（かみむすひ）神」は守りの神、子孫をつくる女の神。消極的集約を意味する。「②高皇産霊（たかみむすひ）神」は、天照大神の孫邇邇芸命（にぎのみこと）の外戚にあたる。積極的に高く伸びる神、男神を意味する霊力、拡張を意味する。集約は還元、拡張は発顕。両者によって生命が誕生。この二神の根本的働きは不二一体である。天地万物創生の神で、天御中主（あめのみなかぬし）神が宇宙に顕現される名でもある。中心があっても、この二神の発展、元に引き寄せる力がなければ、生物は生成化育されないし、逆に二神があっても、中心がなければ、この二つの力が絶えず働くことができない。（秩父のことを例にとると、秩父神社に天御中主（あめのみなかぬし）神が、今宮神社に高皇産霊（たかみむすひ）神、神皇産霊（かみむすひ）神が祀られている。この土地の名である「ちちぶ」の「ち」は「霊」の意であると言われており、二つの「霊」の共存共栄を意味しているとの説がある。）

西田長男の「日本神道史研究」によれば、この二つの神名を見ると「たかみむすび」「た」とれば「かみむすび」であり、更に「か」とれば「みむすび」となる。この「みむすび」は二つの意味をもつ。その一は、霊魂で、霊の蒸し結び、生み成す義。その二は「三魂（みむすび）」で、生魂、足魂、玉留魂の三魂を意味する。この二つの意義は結局一に帰するので、霊の蒸し結び、生みなしたものが三魂である。他説には高皇産霊神を朝鮮・ツングース系につながる穀霊神とするものがある。

「③玉積産霊（たまつみむすひ）神」とは、安定した精神、秀れた智の神、魂（たましい）を神体にとどめておく力を授けてくれる神である。『令義解』に、「離遊の霊魂を招きて神体の中府に鎮む。故に鎮魂という」とある。

「④生産霊（いくむすひ）神」とは、進歩発展、未来志向の神。「⑤足産霊（たるむすひ）神」とは、不足することなくして豊かに充足することを掌り行う神で、豊饒の神。

「⑥大宮売（おおみやめ）神」は、天照大神に近侍した神で、君臣の間を和し、宸襟（しんきん）を安んじ、悦ばしめる神。心が和樂して一切の憂いや苦悩がなくなるよう、霊魂を平らかにする神でもある。大宮売の「大宮」とは、心身ともにすばらしい女体を象徴とし、天宇受売（あめのうずめ）命との説もある。一方、天皇が国家を大宮と思われるその境

地をいうという説もある。「売(め)」は「萌芽」の意である。何事も靈魂の一番集中した処を「め」というのである。それで、大宮売は、天皇がこの国土全体を自らの宮殿と思われて、それを国家の一番大切な眼目であるとされる心の状態を指し、そこから出発されるとの意味となる。それ故にこの働きを裏から見れば生魂になる。

「⑦御食津(みけつ)神」は天皇の日々の供えものを司る神。天皇が全国を大宮と感得し、そこに生育する食物を悉く大御食と考え、御自身が大御膳部となつて国民に食物を与えられる境地である。

「⑧事代主(ことしろぬし)神」とは、やはり天皇の御境地をいう。天皇の鎮魂が進むことにより自身を宮殿と感じて、国の内外のこと、この世、あの世のことも、万事を知り尽くして、国土を安穩に治める境地に進むこと、即ち魂積(たまづめ)の心境になることを云う。そういう意味を踏まえて、祟り封じと、忠孝兼備、朝廷守備、国内統一を念じた神であろう。他説に「言(げん)を司(つかさど)る」という意味もあり、天皇の言葉に威力をつける言霊の神、また神武天皇の皇后の里方にもあたる神。

八神は神であるが、実は天皇が鎮魂を勧める境地が、生↓足↓魂積となるので、それぞれの境地を神徳として表していると理解できる。最後に大直日神の力によつて、天皇としての最高の姿となり、はじめて天照大神にまみえられる、と説明されている。そして、「三代実録」貞観元年(八五九)正月の条をみると、八神は、産霊の万物を創造する靈妙なる神といえる。また、五神には、「神階一位」が与えられている。他の三神、大宮売神・御食津神・事代主神には与えられていない。両者は各系統を異にするために、このように差別が行われたのであろう。

宮中八神はいつから祀られたか、日本書紀によると「高皇産霊尊、因りて勅して曰く、『吾は天津神籬、及び天津磐境を起こし樹ても、当に吾孫のために斎い奉らむ。汝、天児屋根命、大玉命は、天津神籬を持ちて、葦原中津に降りて、亦吾孫の為にも斎い奉れ』とのたまふ。」とある。これが八神奉斎のそもその起源である。大同二年(八〇七)成立の「古語拾遺」の神武天皇の条に、「皇天二祖の詔にしたがい、神々の神籬をたてたが、それが現在の御巫が祀っている八神なり」という内容が書かれている。本居宣長説では「皇天二祖の詔」とは「高皇産霊尊の詔」であるというから、このことから八神祭祀の起源は相当にさかのぼるといふ説もある。八神の中に「事代主命」が加えてあることから推して、八神が定まったのは壬申の乱(六七二)の直後、「八色の姓」制定以前で、天武帝の律令政治はじまりのころ、天武天皇の玉体安護を祈つて祀られたと推定できる。

次に、御巫の「巫」とは、「カムノコ」または「カムナギ」と呼ばれる。祈年祭の祝詞に「八神の名を次々に唱え、そのお力によつて天皇の玉体を安護して頂き、又盛んなる御世に栄えあることを祈つて、幣帛(みてぐら)を献ります。」(次田潤(うるう)『祝詞新講』より)とあり、その奉上は、御巫が申し上げる祝詞となっている。カムナギとは「神和ぎ(かんなぎ)」の意味で、神を祀り、神の心を和わらげる童女のことといわれる。

延喜の制によると、古くは中臣・忌部氏が御巫八神の祀り方を伝えていたが、中世以降から、八神は神祇官の西院に祀つて、「八神殿」と称した。戦国時代以降、世上の動乱につけて荒廢した。江戸時代を通じ、吉田家、白川家の努力によつて奉斎が続けられていたことはよく知られている。

明治五年（一八七二）には、八神と天地神祇を宮中に移して、相方を合併して、従来の八神殿の様を廃して「神殿」と称した。御巫八神は、現在、宮中三殿（賢所・皇靈殿・神殿）の一たる「神殿」に鎮まられている。

京都府中郡大宮町にあった大宮稻荷神社の八神は、神社々務所の話によると、維新の時、宮中に返されたということである。したがって、現在（平成十一年）神社境内には由緒に関するものは皆無と見受けられる。

このほか、大宝年間役行者が飛来して八大龍王を祀ったとされる秩父の大宮山八大宮（現今宮神社）では、役行者飛来以前に大宮売（おおみやめ）神を主座する八大社が祀られていたとの伝承がある。ここは「大宮山」の山号で呼ばれ、この地は長い間「大宮町」と呼ばれており、「秩父（チチブ）町」となったのは大正六年のこと。氷川大宮、杉並大宮八幡とともに「武蔵三大宮」と呼ばれたところでもある。仏教伝来があり、神仏習合時代への橋渡しの役割を担った八大龍王は、その格式から、八神に相応しい神仏習合の神であったということだ、と伝えられている。それ故、大日如来が習合され、秩父霊場発祥の中核となり、中古より「八大権現社」と呼ばれ、文亀元年（一五〇一）社殿再興、正徳元年（一七一〇）社殿再々興の記録をみる事ができる。

江戸時代に入って、江戸の庶民の観音信仰の高まりにより秩父観音霊場巡りが盛んとなり、妙見宮の付祭り、絹の市の開始、観音堂の建立に見るごとく、秩父地方は目覚ましい発展を遂げたが、その中核となっていた大宮山八大宮（八大権現社）は、明治維新後に神仏分離令で解体される迄、八大宮司家の塩谷家によって祀り続けられたのである。

神仏分離令により分離・封印を余儀なくされた八大宮であった。それ故、合祀されていた「御巫八神」の名は人々の口にのぼることもなく、八大龍王は「（おかみのかみ）」とその名が秘され、公式の記録から消えた。その後も、明治・大正・昭和へと続く物質万能の世界の中で、また神社活動の低調期の間「八神」に光が当てられることもなく、「八大龍王」も共にうずもれる寸前迄だったのである（「今宮神社」並びに「八大龍王」の項参照）。

しかし、百観音信仰の興隆と観光ブーム並びに交通路の発達に伴い、観音菩薩と不離一体といわれる八大龍王神への関心は、水の神、万物の生命の大宗（おおもと）、エネルギーの神、観音との両参りの神、環境保全・共存共栄の神、異質なものととの和合を進める神として、少なからず人々の関心を呼ぶ時代となったようである。それに従い、合祀された宮中八神即ち「御巫八神」への関心と信仰もわずかながら芽生えがみられる昨今となっているようである。

なお、八大宮（八大権現社）は明治維新以降解体されたが、大般若経六百卷は広見寺に、御神輿は今宮から独立した御岳神社（現武甲山神社）に、社号額は札所二十八番橋立寺に、それぞれ寄贈されている。

【参考文献】

- 「神祇辞典」（平凡社、大正三年）
- 「神道辞典」（神社新報社、昭和四十二年）
- 「神道大辞典」（京都臨川書店、一九八一年）
- 「日本神道史研究」（講談社、昭和五十三年）

「神社新報」(神道の基礎知識、読者の質問箱、平成六年五月二三日)

「日本神社総覧・式内社所在一覧」(新人物往来社、西牟田崇生)

「今宮神社取調書」(秩父市立図書館蔵、明治二十八年)

塩谷治子